

**津**久井観音めぐりの途中、前から気になっていた“沼本ダム”について、詳しく知りたいと思っていたところ、5日目に津久井の内郷という所でダムを真上から見下ろすポイントを見つけた。上から見下ろしたそのダムは、津久井湖の湖面と沼本ダムの湖面とがわずかに10メートル位の落差で仕切られているように見えた。向こう側には取水口設備も見える。(下の写真)これが谷ヶ原の水道と発電用の取水口なのだ。



はそっちのけで、あの対岸にどうしても行ってみたいと、

左から道志川が合流している



藪を掻き分けて車に戻り、桂橋を目指すことにした。

**桂**橋を渡りきったところを右折し、クネクネした道を進むと、“全面通行止め”の厳重なバリケードで閉鎖されている。車はここに駐車し、ここからはバリケードを強引にすり抜け、歩いて目指すことにする。

此の道は、10年位前の大規模ながけ崩れで全面通行止めになったまま閉鎖されてしまった県道で、今では誰も歩かないのいない筈の道だが、一人一人が歩ける幅で草木が踏みつけられたり、切り倒されたりしているところをみると、登山者のような人が立ち入ることがあるのだろうか？途中で小さな滝があり、そこから登山用の崩れかけた金属製の階段が残っている。

道の所々には、無数の落石やガケ崩れがあり、大きな岩や瓦礫が道を覆っている。天気が悪ければ危なくて全く近づけない危険な道である。今日はひるまずに瓦礫を乗り越えて、慎重に気合を入れて突き進むしかない。

ダムマニアの間では“幻のダム”と呼ばれているようで、津久井湖(城山ダム)の湖面の高さによっては、ダム堰堤が水没してしまい、まるで堰(せき)のようにしか見えないらしく、水面の下がった今の津久井湖なら、ダム全体がもっと見られる場所があるのではないかと、観音めぐりの途中で車を利用したことから動き廻ってみることにした。

**最**初に、ダムを正面から見られる場所を探す。三ヶ木の野尻という所に車を止め、それらしき道を探すと偶然湖面へ降りられる道が見つかった。笹藪に覆われて塞がっているが、道の痕跡ははっきりしており、藪を掻き分けて降りてゆくと、前が一気に開けた途端、感動的な幻のダムが目の前に広がった。(右上の写真)

津久井湖の水が少ないので、左側から道志川が砂の中州を切り分けて合流している様子までも見てとれる。

ダム右側100メートル位の所に、何か作業しているボートが小さく見える。きっとあの辺りが水没した横浜水道の取水口の遺構に違いないと思われた。今なら普段は水没している遺構が見られるかもしれないと思うと、観音めぐり



ガードレールを押し流している、こんな状態の崩落現場がしばらく続く。立ち止まって撮影しているだけでも緊張する。

**桂** 橋から約3キロ位、閉鎖された道を突き進んだところで、眼下にダムを上流から一望できる所まで来た。

この山陰に横浜水道の遺構がある筈である。

最初の写真は、ダムの向こうのこの位置から撮ったものである。



アングルだろうなあと、幻のダムにここまで近づけた満足感に浸りながら撮りまくった。

普段なら、この辺まで手前の津久井湖に水没して、向こう側の沼本調整池と同じ水面になっている。ダムが水没してしまうことから幻のダムと云われている。



もう少し下流に横浜水道の痕跡があるはずである。ダム堰堤の真上を少し過ぎた所に、簡易階段を取り付けた降り口を見つける。此の階段を慎重に50m位下りていくと、横浜水道の記念碑が突然現れ、更にレンガ造りの水道設備の遺構が現れた。丁度対岸から見えていたボートの作業員たちが休憩を取っており、やはり遺構の保存修復工事をやっているところだった。(下の写真)



見学させてもらう旨を告げて湖岸に出てみると、苦勞してここまで来た甲斐があった。でっかいダムが目の前に鎮座している感じで迫っている。しばらく動けないほどの圧倒的な近さである。大きさへの感動ではなく優美さへの感動である。ダムに一番近いところまで湖岸の瓦礫の上を慎重に近づいて写真を撮りまくる。ダムマニアにはたまらない



足元には明治の痕跡が無数に転がっている。水際から水中にもレンガの塊がブロックではっきり見える。

これが日本最初の水道設備、明治時代の取水設備の遺跡なのだ・・・。イギリス人技師パーマーの指導を受けながら築き上げた先人たちの智慧に直に触れられて、バラバラのレンガの一つ一つがいとおしく見える。対岸には、三角州を造りながら、ゆったりと津久井湖に合流している道志川の様子も、滅多に見られないアングルから眺めることができた。

ダムの堰堤から放水される様子は、此の角度からでは見ることが出来なかったが、5日目に上から見下ろした時にはわずかに放水しているようだった。それにしても津久井湖

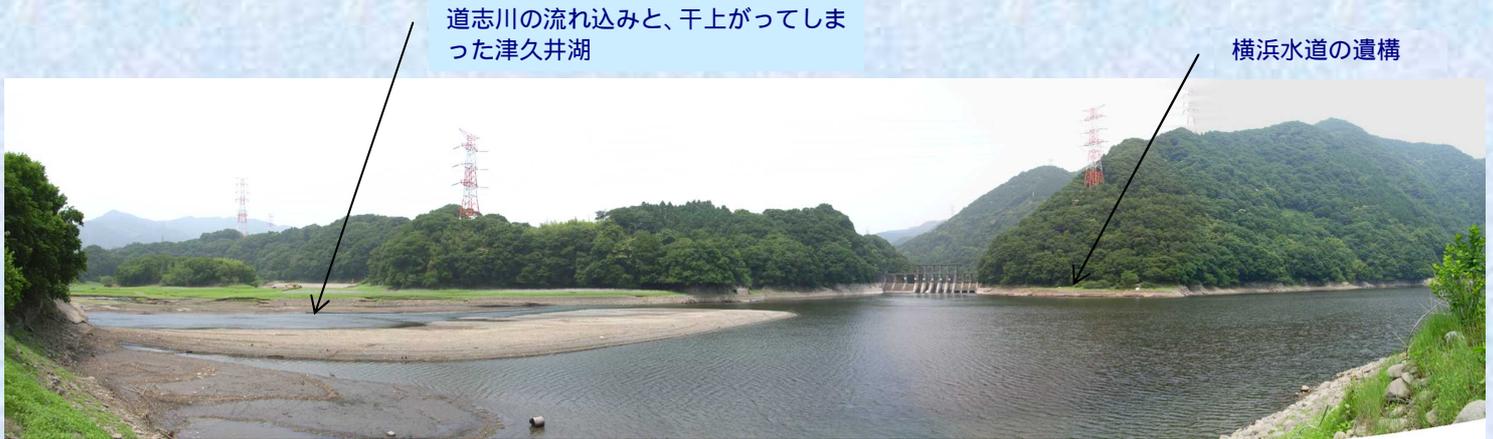
が満水になると、このダムの上流が水没するというのが、周辺の変色具合ではっきり見てとれる。ダムの堰堤の殆どや、今立っている足元のレンガの遺構などが全て水没してしまうのかと思うと、とんでもなく貴重な所に立っていることに感無量である。

それにしても、無謀にも沼本ダムをぐるりと一回り探索することが出来たが、津久井湖の水が極端に少ないこともあり、本当に貴重なシーンに出会えたことに大満足であった。

**相** 模原 70 万市民といえども、このダムに会いに来るものは殆どいないだろう。

明治の先人たちの英知がしみ込んだこの造詣を、全て呑み込んでしまう深緑の津久井溪谷の相模川と、道志川とのこの合流で、溪谷が一気に開放されるこの空間には、沼元ダムは神々しく、本当に美しい**幻のダム**であった。

**幻のダムよ、永遠に！！**



道志川の流れ込みと、干上がってしまった津久井湖

横浜水道の遺構

普段はこの白い部分まで津久井湖の湖面があり、堰堤部分は水没してしまう。



沼本ダムと津久井湖がつながってしまい、堰堤が水没した普段の様子（ダムのHPより引用）



位 置	北緯 35 ° 36 07 東経 139 ° 13 48
河 川	相模川水系相模川
目的 / 型式	WIP / 重力式コンクリート
堤高 / 堤頂長 / 堤体積	34.5m / 126m / 52,000 m <sup>3</sup>
流域面積 / 湛水面積	1039.4k m <sup>2</sup> / 35ha
総貯水容量 / 有効貯水容量	2330 千m <sup>3</sup> / 1534 千m <sup>3</sup>
ダム事業者	神奈川県
本体施工者	大成建設
着手 / 竣工	1937 ( S12 年 ) / 1943 ( S18 年 )
ダム湖名	沼本調整池 ( ぬまもとちょうせいち )

**その他情報：** 沼本ダムからは相模原市民の水道水として谷ヶ原浄水場へと、更に発電用として谷ヶ原にある津久井湖発電所の 1 号機に送水している。2 号機へは、城山ダムの完成に伴い津久井湖より送水されている。(津久井湖発電所の完成 ; S18 年、能力 ; 25,000kW、発電所完成当初は 1、2 号発電機とも沼本ダムからの送水だった。津久井湖の完成は S40 年)